

マーク・トウェインとストレンジャー ー ミシシッピからの離脱 ー

Mark Twain and Strangers - Escape from Mississippi -

江 頭 理 江

Rie EGASHIRA

国際共生教育講座

(平成17年9月30日受理)

I.

19世紀のアメリカを代表する国民的作家Mark Twainは、これまで自らの作品世界の中に印象的なstrangerを描きこんできた。トウェインにとってのストレンジャーとは果たして何者なのか。

キャラクターとしてのストレンジャーについて考察することは、トウェインの作品を分析する上で、一つの手がかりとなる。Missouri州の片田舎の出身であるトウェインにとって、東部出身の妻と結婚したのちの東部での生活は、自らをいわばストレンジャーと時に感じさせるものであったろう。その彼が描くキャラクターとしてのストレンジャーは、トウェイン自身のよそ者感とあいまって、作家としての彼の特質を探る要素となり得るのである。

本論は、トウェインにとってのストレンジャーとは何者であるかを探ることを目的とする。移民の国アメリカにとって、「ストレンジャーとは何者か」という問いかけに、明確に答えることは難しい。もちろん辞書的な意味でストレンジャーを定義することは可能であるが、それをアメリカという国にあてはめてそのコミュニティの特異性を鑑みた時、ストレンジャーの定義は難しいものとなる。もちろんここでは、辞書的、歴史的観点からの模範解答を作ることではなく、あくまでもトウェインにとってのストレンジャーの意味合いを探りたいと考えている。トウェインの作品を読み解きながら、それぞれの世界の中でのストレンジャーの役割を捉えていく中で、大きな役割を果たしていると考えられるものは、彼の生まれ育ったMississippi河の存在であろう。時には自らをよそ者と感じざるを得なかったトウェインにとって、ミシシッピ河こそは彼を本来の自己へと引き戻してくれる唯一の拠り所ではなかったのだろうか。ストレンジャーが主要なキャラクターである作品群を分析し比較することで、トウェインにとってのストレンジャーの意味合いといったものが見えてくるのではなかろうか。

II.

この章では、まずストーリーの展開にストレンジャーが重要な役割を占めている四つの作品について、ストレンジャーの役割を分析する。取り上げる作品は、*A Connecticut*

*Yankee in King Arthur's Court, Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twains, "The Man That Corrupted Hadleyburg", The Mysterious Stranger*である。

まずはじめに、ストレンジャーということばの定義を、辞書から確認する。*Webster's Third New International Dictionary*においては、“**1**: one who is strange: as **a**(1): one who comes from a foreign land, **b**: one not in the place, **c**: a person or thing is unknown or with whom one is unacquainted**d**(1): one who does not belong to or is not permitted to take part in the activities of a group, organization, or society....**2a**: one ignorant of with a thing, person, fact, or set of ideas”のように定義されている。上の作品群に登場しているストレンジャーのキャラクターは、**1**の概念に当てはまるものである。

『コネティカット・ヤンキー』においては、19世紀のアメリカ東部のコネティカット生まれのヤンキー、Hank Morganが、6世紀のアーサー王時代のイギリスにタイムトリップし、そこで19世紀のアメリカの文明社会を模した独自の文明を展開する。トウェインは中心的なキャラクターであるハンクに、時空を大きく超えてタイムトリップさせている。上で述べた定義にあてはまれば、**1 a**(1)の「外国から来た者」ということになるだろう。ハンクは、19世紀の文明社会を6世紀に再現することに一応成功し、物語の後半部分では王国の文明を支配し、The Bossとして王よりも強大な力を持つ。王国の近代化については、ハンクは騎士と対決し、遍歴騎士制度の廃止に成功して、物語の終盤の第40章では、最新の機械文明を人々の眼前に提示し一応の成功を収める。しかしながらその状況は長くは続かなかった。ハンクは娘の病のため、一家を上げて療養のためにフランスへ赴き、その間に教会が政務禁止を打ち出して、彼が作り上げた美しき近代文明は、火の消えたごとき状態となる。さらにはこれをきっかけに、戦争が始まり、王国は戦いへと突き進んでいく。

注目すべき点は、戦争が始まってすぐにハンクが取った行動は、自らが築き上げた文明工場の破壊である。その状況をハンクは、以下のように述べている。

In that explosion all our noble civilization-factories went up in the air and disappeared from the earth. It was a pity, but it was necessary. We could not afford to let the enemy turn our own weapons against us. (249)

ハンクは、敵が自分たちの高度に文明化した武器を使うことは許せないという理由で、文明という強大な王国を自らの手で破壊するのである。つまり、文明の創造者としての立場を取ってきたハンクの役割は、ここで破壊者に転換したと言える。さらに、ハンクはダイナマイトの爆破と鉄条網に電流を流すことによって、死者が「鉄と金属粒の合金と一緒に散らばっていた」(249)という実に残虐な手段で多くの人を殺す。創造者であったハンクは破壊者となり、さらには惨殺者へと変貌している。

この物語はあくまでもリアリズムの小説でないゆえに、この悲壮な戦いの象徴する意味についても合わせて考える必要があろう。この点については、これまでもいろいろと論評されてきたが、たとえばRobert Giddingsが述べるように、この戦争はアメリカの南北戦争の恐怖を描いたものと考えることが、妥当ではなかろうか。

the Battle of the Sand Belt, may be read as a portrait of the U.S. Civil War, the

マーク・トウェインとストレンジャー
—ミシシッピからの離脱—

first war of modern times, fought with the pitiless technology of destruction made possible by 'progress'. (21)

南北戦争を実際に体験したトウェイン自身が、近代兵器を用いる戦争がいかに残虐なものであるかを訴えかけていると考えられよう。戦争反対のトウェインの姿勢がうかがえる部分である。

この「砂ベルト地帯の戦い」の場面で、さらに注目すべき点は、文明破壊と残虐な殺人をもってしても、ハンクら一行が勝利をつかめなかった点である。戦いに参加したハンク一行については、ハンク以外の者は結局のところ閉じこもっていた洞窟から脱出できず、死を待つだけとなり、一方魔術師の魔法によって1300年もの間眠らされたハンクは、19世紀に目覚めるものの、譫妄状態の中で、6世紀に残してきた妻や家族などへの思いを語りながら亡くなっていく。彼は今までの人生を振り返って、以下のようなことばを吐く。

I seemed to be a creature out of a remote unborn age, centuries hence, and even *that* was as real as the rest! Yes, I seemed to have flown back out of that age into this of ours, and then forward to it again, and was set down, a stranger and forlorn in that strange England, with an abyss of thirteen centuries yawning between me and you! Between me and my home and my friends! Between me and all that is dear to me, all that could make life worth the living! It was awful—awful than you can ever imagine, Sandy. (257)

ハンク自身のコミュニティに対する所属意識は6世紀のイギリスにあり、彼が自らを6世紀の人間として認識したことは、よそ者であったハンクがすでによそ者ではなくなっていることを示すと言えるだろう。

6世紀のイギリスを舞台にしたこの物語は、君主政体の矛盾をつき、そこに中世ヨーロッパを風刺する作者トウェインの姿勢がうかがえる。同時に自らの手で作り上げた近代機械文明を自らの手で破壊する点や、恐ろしい戦争の様子が南北戦争を想起させる点に注目すると、トウェインの批判の目は、19世紀のアメリカそのものに向いているとも考えられる。しかも最後の場面で、6世紀のイギリスに生きることを願うハンクの姿は、6世紀のイギリスというコミュニティに埋没することによって、ストレンジャーがストレンジャーでなくなるという図式を、時間を越えた大きな枠の中で示している。さらにストレンジャーであったハンクの役割について整理すると、創造者と破壊者という正と負の二面性を持っており、このことは作品世界において一元的に解釈できないため、しばしば述べられるトウェイン自身の多面性と関連があるようである。

次に、『間抜けウィルソン』と『あの途方もない双生児』について考察するが、特にこの小論では印象的なキャラクターとしてストレンジャーが登場するという点で、「間抜けウィルソン」の方に注目する。この作品の主要なプロットは、16分の1だけ黒人の血が混じった奴隷女のRoxyが、白人である主人の子と黒人である自分の子供を取替え、黒人であった自分の子供が白人の主人の子として育てられた結果、素行の悪い青年として成長し、拳銃の果てには、伯父を殺害し、最後は黒人としての素性がばれて、「河下に売られてしまう」というものである。テーマとしては、遺伝と環境の問題、人種差別の問題が、大きく取り扱われている。32分の1だけ黒人の血の混じった青年が、素行の悪い人間に成長し、

殺人をも犯すという筋立ての中には、確かに遺伝と環境を人間成長の重要な要素と位置づけるトウェインの姿勢が読み取れる。また、悪事が発覚したTomが、黒人であることがばれて、法律的に罰せられることなく、河下の状況のより厳しい奴隷保有地へとただ売られてしまう点を中心に、奴隷制度の悪弊がわれわれの眼前に示され、トウェイン自身の奴隷制度反対の立場が窺える。トムとロキシーの親子は、町のコミュニティの中にどっぷり浸っているがゆえに、周りを取り巻く状況とその矛盾に気づかない。また彼ら以外のDawson's Landingのコミュニティ内部の人々も奴隷制度の悪弊などには気づかないのである。

Dawson's Landing was a slaveholding town, with a rich, slave-worked grain and pork country back of it. The town was sleepy and comfortable and contented. It was fifty years old, and growing slowly—very slowly, in fact, but still it was growing. (57)

奴隷制度を長い間、あまりに当然のものとして受け入れてきた結果、コミュニティ内部の人々は、制度の悪と矛盾を認識できなくなっているのである。

一方、コミュニティ外部にいたるものとして、ウィルソンとイタリア人の双子が登場する。ウィルソンは、東部出身で、25歳の時、この町へ意気揚々とやって来た新進気鋭の弁護士であったが、到着早々何気なく発したことばのために、“pudd'nhead”というあだ名をつけられ、20年もの間弁護士の仕事もなく、細々と生計をたてていかなければならなかった。彼の趣味である指紋集めも、最後には事件の重要な鍵となるが、それさえも奇妙な趣味として冷たい目を向けられる。しかし、彼は町のコミュニティとほとんど接点を持たないがゆえに、コミュニティの悪に染まることなく、最終的には弁護士としての才能も認められ市長にまで昇進する。すでに述べたストレンジャーの類型で言えば、「社会に属していないもの」ということになる。

作品世界における彼の登場頻度はそれほど多くはないが、実は物語のプロットを握る重要な部分を占めている。彼の趣味である指紋集めが殺人事件を解く鍵となり、トムが真犯人であることと、黒人であることが明らかになる。少なくとも殺人事件の真犯人発見に大きな役割を果たした点については、ストレンジャーであるウィルソンがこの町の救済者としての役割を果たしたと言えよう。『コネティカット・ヤンキー』において、よそ者ハンクが創造者としてコミュニティにプラスの役割を果たしたことは述べたが、この物語においてもよそ者ウィルソンがコミュニティを救う役割を果たし、コミュニティの外から来たものがコミュニティを正義へと導いたという点で、共通点を持つ。

ウィルソンは、この町の奴隷制度の現実とはほとんど接点を持たない。それは次に述べるイタリア人の双子にも共通し、そこには奴隷制度の悪を描きながらも、完全にはそれを否定しきれていないトウェインの曖昧さが伺える。トウェインは奴隷保有コミュニティに育ったがゆえに、制度の悪を指摘しながらも、その制度を受け入れてしまっているところがある。自伝の中の次のことばが、奴隷制度に対する正直なトウェインの感想であろう。

In my school days I had no aversion to slavery. I was not aware that there was anything wrong with it. No one arraigned it in my bearingthe local pulpit taught us that God approved it, that it was a holy thing. (6-7)

トウェイン自身の曖昧な姿勢は、コミュニティの外部者であるウィルソンとイタリア人の双子が、奴隷保有社会の制度の現実とはほとんど接点を持たないところにあらわれているであろう。

もう一組の外部者であるイタリア人の双子は、最初この町に始めてやってきた外国人、しかも貴族の称号を持つ高貴な存在として崇められるものの、選挙での敗北や彼らの短剣が殺人現場で見つかり投獄されたことで、結局はこの町に失望してヨーロッパへと引き上げていく。彼らは熱狂的で冷めやすいコミュニティの人々に振り回され、その様子は読者には全く滑稽に映る。ウィルソンに関しては、うっかり発したユーモラスなことばがコミュニティに受け入れられなかった結果、ひどい状況に陥ったことはすでに述べたが、双子の場合も同じく、コミュニティに一旦は興味本位で受け入れられたものの、結局はコミュニティから捨てられるわけで、両者はこの点において共通点を持つ。ここには、自分たちの意識レベルと合わないもの、すなわちウィルソンと双子に象徴されるストレンジャーを排除する封建的なこの町のコミュニティの姿が浮かび上がってくる。ただし、ハンクが破壊者としての役割をも負ったことと比べると、この作品のウィルソンと双子が破壊者的役割を果たしたかという点については、少々異なっている。ウィルソンの場合は、彼の指紋捜査の結果が、トムを殺人の真犯人と解明し、黒人であることもばらして、彼が河下に売られてしまう点に注目すると、赤ん坊の取替えまでして息子トムを助けたかった母親ロキシーの人生を失望に導いたという意味において、破壊者的役割を果たしたとは言えよう。ただし、トムが殺人犯であることを考えればそれも当然のことであるわけである。ウィルソンと双子が奴隷制度保有のコミュニティの現実に向き合っていない点、コミュニティが封建的である点が、物語世界におけるストレンジャーの役割を曖昧にしていると思われる。

1899年に出版された“The Man That Corrupted Hadleyburg”は、過去にひどい仕打ちを受けたあるストレンジャーの策略によって、その実態が明らかになるハドリバーグの町を描いた短編である。作品の出来に関しては、評価が分かれており、それはこの作品が構造的にも内容的にも複雑であることによる。ハドリバーグの町が最終的には、ストレンジャーの企みどおりに、表面的には腐敗した実態を露呈したのち、道徳的に再生したと言えるのか、あるいは腐敗の実態を露呈したにもかかわらず、以前と同じく内面の墮落と外面の高潔さという二面性を持ち続けているのかという、二つの解釈ができる。

1人の旅人がハドリバーグの町で侮辱を受けたことの復讐に、墮落を知らない町ハドリバーグを墮落させることを目的に、ある策略を仕掛ける。この人物は、自らを“I am a foreigner, and am presently going back to my own country, to remain there permanently....I arrived in this village at night, hungry and without a penny” (4).と述べている。辞書の定義に従えば、外国人という範疇のストレンジャーということになるであろう。彼は、町の住人の中でも高潔で有名な19人に彼が置いていった金貨を手に入れるためのことばを教え、金に目がくらんで謂れない金を手に入れようとする人々の滑稽な様子を、町のコミュニティの外から眺めてきた。しかしながら、実際はコミュニティの典型的な1住人であるRichards夫妻が誘惑に堕ちて金を要求していたにも拘らず、名前を読み上げる役割のBurgess神父の計らいで隠蔽されたことによって、ストレンジャー自身も欺かれ、夫妻を誘惑に堕ちなかったもっとも正直な住人として見誤り、金貨を最終的には与えてしまう。コミュニティ外部の者が仕掛けた罠にかかってしまった住人と、一方で住人の罠にかかってしまったストレンジャーという二重構造のある作品である。この二

重構造こそが、2種類の異なった解釈を生んでいる。

物語の結末で、墮落した町の実情がさらけ出されたあと、町は名前を変え、町のモットーを“LEAD US NOT INTO TEMPTATION”（我らを誘惑に導くなかれ）(69)から、“LEAD US INTO TEMPTATION”（我らを誘惑に導きたまえ）(69)へと変更した。ハドリバーグが果たして道徳的に再生したのか否かについては、「道徳的に再生した」という解釈と「道徳的に再生するどころか以前よりも狡猾になった」という解釈の二つの可能性がある。

「町が道徳的な再生した」という考え方に立てば、Henry B. Ruleが言うように、ストレンジャーに救済者の役割を与えることになるだろう。

When one recognizes that ‘the mysterious stranger’ in the story is Satan, then Hadleyburg becomes an ironic Eden that is diseased by hypocrisy and money-lust – an Eden that is symbolic of the fallen hopes of the American forefathers for a new paradise on Earth where mankind could begin afresh in peace and brotherhood and Godliness. In Twain’s treatment of the Eden myth, Satan plays the role of savior rather than corrupter. The Eden of Hadleyburg, microcosm of America, is already corrupted by greed and deceit before Satan arrives on the scene. Although his initial motivation may have been revenge, the result of Satan’s machinations is to lead Hadleyburg, perhaps without his volition, to some degree of moral reformation. (77)

ストレンジャーに救済者の役割を与えるのは、『コネティカット・ヤンキー』や「間抜けウィルソン」においてストレンジャーが正の役割を持ち、町を善へと導くことと共通する。一方、ハドリバーグの町は一層狡猾になったという解釈を、「高潔な町ハドリバーグ」の仮面を剥ぎ取ったという意味に考えれば、ストレンジャーは破壊者としての役割を持ち、これは『コネティカット・ヤンキー』における破壊者としてのハンクの役割とやはり共通性を持つのである。

これまでストレンジャーが物語世界に大きな影響を及ぼしてきた作品について、その役割を中心に考察してきたわけだが、*The Mysterious Stranger*は、タイトルそのものにストレンジャーが用いられていることから、読者はよそ者の登場を予想することとなる。すでに明らかになっているように、この作品は、トウェインの死後、文学遺産管理人である Albert Bigelow Paineによって、3種類の原稿から編集されたものであり、このままの形で作家が執筆したものではない。それゆえ、この作品を一つの統一的なものとして論評することはできない。ここでは、トウェインの人生観がもっとも投影されている最終章について考察し、そこでのストレンジャーの役割について考えることにする。

この流布版の最終章に取り入れられ、作品としてはもっとも完成度が高い “No.44. The Mysterious Stranger” の最後の場面の1904年に執筆された箇所において、ストレンジャーのことばを通して、トウェインの人生観を垣間見ることができる。「君に見せたように、神も、宇宙も、人間も、地上の生活も、天国も、地獄も、何も存在しないのだ。」(405)という見知らぬ少年44号のことばは、晩年のトウェインを裏付けることばとして引用されるが、これに続く箇所では不思議な希望に満ちた状況が描かれている。少年との別れに際して、主人公Augustが「あちらの世界ではまた君に会えるよね。」(403)と問いかけた時、

少年は「あちらの世界などないよ。」(403)と答え、それを聞いたアウグスト自身は失望するところか、「曖昧で漠然としていたが、その信じられないことばが真実かも知れない。いや真実に違いないという喜ばしく、希望に満ちた感情が吹き込まれる。」(403)のである。さらに「未来の生活は幻であり、存在しないのだ。」(403)と告げられた時、アウグストは「心の中で葛藤している大きな希望のために、ほとんど息もできない。」(404)状態になるのである。死後の世界も含めて、すべてを否定するストレンジャーのことばに、大きな希望を感じるということを、われわれはどう解釈すべきであろうか。

この作品についてはトウェインが年をとるにつれて悲観主義へと陥ったとするこれまでの定説に従えば、この部分の解釈は非常に難しいものとなる。しかしながら、次に述べる自伝の中のことばを手がかりに、トウェインの晩年ペシミスト説に異論を唱え、この部分はトウェインがいろいろなしがらみを吹っ切ってある種のオプティミストへと変容したのだと考えられ、解釈が容易になる。

But I have long ago lost my belief in immortality—also my interest in it.... Annihilation has no terrors for me, because I have already tried it before I was born—a hundred million years—and I have suffered more in an hour in this life, than I remember to have suffered in the whole hundred million years put together. There was a peace, a serenity, an absence of all sense of responsibility, an absence of worry, an absence of care, grief, perplexity; and the presence of a deep content and unbroken satisfaction in that hundred million years of holiday which I look back upon with a tender longing and with a grateful desire to resume, when the opportunity comes. (249)

この考えに基づくと、この少年44号の役割は、実は一層明確になる。1880年以降の三つの作品について考察してきたように、あるコミュニティにある人が何らかの思惑を持ってやって来た場合、その人物はそのコミュニティにとっては、辞書の定義に基づいても、ストレンジャーとなる、確かにこれまでの三つの作品においては、その定義にあてはまるストレンジャーが登場する。その役割については、コミュニティにとってプラスに働く場合と、マイナスに働く場合の正負二つの場合があり、コミュニティとの関わりをどう読み解くかによって、解釈が分かれる。その考え方をこの『不思議な少年』に当てはめた場合、「少年44号」版を中心に考えると、トウェインがしばしば舞台としたSt.Petersburgを模したヨーロッパの田舎の村、Eseldorfで、このコミュニティにどっぷり浸りきった少年たちは、44号による不思議な力体験し、また悲惨な人間同士の殺し合いなども見せつけられるわけで、アウグストが最後にすべてを打ち消す44号のことばに失望のみを感じたのであれば、44号は破壊者としての役割のみを持つであろう。一方アウグストが彼のことに感じる「息もつけないほどの希望」は、実は44号が救済者としての役割を持つことを意味する。この場合、アウグストたちは、何から救済されたと考えられるのだろうか。キリスト教信者としての既成の宗教観から離れたトウェインは、物語世界では44号の信奉者であるアウグストに対して、annihilation(無)の極意を授けたという意味において、救済者の役割を果たしたということになるのではなかろうか。

これまで、四つの作品における、ストレンジャーの役割を、コミュニティとの関わりを中心に読み解くことで、その役割が、救済者としてのプラスの役割と、破壊者としてのマ

イナスの役割とに解釈できることを、検証してきた。その二面性は、いわゆるトウェイン自身の多面性、たとえば、オプティミストとペシミスト、奴隷制度反対の姿勢と奴隷制度認容の姿勢、彼自身の中の東部と南部、Samuel Langhorne Clemensとマーク・トウェインなど、彼個人の曖昧さと矛盾から生じていると考えていいのではないか。

次の章では、80年代以前の作品、特に *The Adventures of Tom Sawyer* と *Adventures of Huckleberry Finn* において、ストレンジャーはどのように登場しているのか、さらに80年代以降の作品のストレンジャーとの共通性はあるのか、という点について検証する。

Ⅲ.

1876年に出版された『トム・ソーヤーの冒険』は、子供の楽しめる面白い物語ではあるが、作品の完成度については、『ハックルベリー・フィンの冒険』の方が高いと評価されている。物語の主な舞台は、トウェインの育った町Hannibalを思わせるセント・ピーターズバーグであるが、それ以外の舞台としては、トムにとってロマンティックな世界の象徴であるCardiff Hill、ハックとともに想像上の海賊の海賊体験をするJackson's Island、想いを寄せているBecky Thatcherと一緒に迷子になるMcDougal's Caveが主な舞台として取り扱われている。これらを舞台としてのトムの冒険体験が繰り返されていくわけである。ここで中心となるコミュニティは、セント・ピーターズバーグの村であり、トムはいろいろないたずらもするが、基本的にはコミュニティにどっぷりと腰を落着けているキャラクターである。

Aunt Pollyにペンキ塗りを命じられたトムが憂鬱な気分でカーディフの丘を見上げた時、そこは“Delectable Land” 楽土として彼の目に映り、また海賊になりきった気分でのジャクソン島での生活は、“It was the cool gray dawn, and there was a delicious sense of repose and peace in the deep pervading calm and silence of woods” (121). という心身ともに解放された気分になり、彼はそれらの体験を大いに喜んでいる。しかしながらそれでも、トムは必ず冒険の後に、セント・ピーターズバーグに帰って来る。つまり、彼はコミュニティの周辺での冒険に満足したのち、必ず文明化された村コミュニティに帰って来る少年である。その姿勢は、村の浮浪児で学校にも行かず、思いのままに生きてきたハックが、Widow Douglasに引き取られ、窮屈な生活に耐えられなくなったとき、“if you'll try this thing just a while longer you'll come to like it” (289).と言って彼を諭し、「もっときちんとしていないと、お前を仲間に入れるわけにはいかない。」(290)とまで言って、トムは自らがコミュニティ側の人間であることを実は表明しているのである。この作品は、セント・ピーターズバーグのコミュニティが中心となって物語が展開しているので、第2章で述べたようなストレンジャーがコミュニティに入り込んでくるという図式は、明確には展開しない。ストレンジャー的役割を果たすのは、コミュニティの中に属するのかコミュニティの外に属するのかについて曖昧な立場にいるハックとInjun Joeであろう。ハックは村の浮浪児で、村コミュニティに一応は属しているものの、その状況に少々苦痛を覚えているが、コミュニティの住人そのものであるトムの命令には従うし、トムの教えにそむくことはできない。というより、トムに反抗しようという気もなさそうである。80年代以降の作品において、ストレンジャーが破壊者と救済者の2種類の役割を取りうることは述べたが、ハックについては、このような役割は見られない。ハックは外の社会から入り込んできたよそ者ではない点、しかもコミュニティ内部のものと強い関わりを持って

マーク・トウェインとストレンジャー
—ミシシッピからの離脱—

いる点から、ストレンジャーと言えないハックは、破壊者、救済者の役割は持ち得ないのである。またインジャン・ジョーに関して見ると、インディアンとの混血で、村人をこれまでに5人殺したとの噂があり、実際ここでも殺人を犯し、疎まれながらも裕福な白人の家に食べ物をもらいに行くというような人物として描写されている。このような点からすれば、ジョーは外部からのストレンジャーではないにしても、ハックと比べるとコミュニティへの所属意識や関心ははるかに低いと言える。彼は、コミュニティのごく周辺部で、コミュニティの中心社会に不満を持って、生きてきた男である。物語世界においては、医師殺害を仲間押し付け、逃亡するものの、盗んだ金の隠し場所である洞窟の中から出ることができず、餓死してしまうという、悲惨な末路を辿る。むしろ彼は自分自身を破壊してしまったとも言える状況に陥ったわけで、ストレンジャーが破壊者的役割を持つ80年代以降の作品群とは、「破壊者」という点のみ共通するが、コミュニティとの関わりから推し量られる役割は異なっている。

この作品では、中心的人物であるトムはコミュニティ周辺での冒険ののち、必ずコミュニティ内部に戻ってくるキャラクターで、コミュニティから飛び出していったままで終わることはない。これは80年代以降の作品群が、中心的キャラクター、もしくは重要な鍵を握るキャラクターに、ストレンジャーの役割を与え、さらに破壊者と救済者の2種類の役割を付したことは大きくことになっているのである。このことを、われわれはどう読むべきなのであろうか。『トム・ソーヤー』は作者トウェイン自身の、古き良きアメリカ、特に故郷ハンニバルでの思い出が体言化された作品である。お上品な悪がきトムのイメージは、実際の子供時代のハンニバルでのトウェインとは少々異なっているかもしれないが、それは1870年に東部出身で「お上品な伝統」を旨として育てられたOlivia Langdonと結婚したトウェイン自身の変化の表れであると言えよう。トウェインはこの結婚に大いに満足しているものの、東部出身の妻の目を意識しての執筆活動の中で、ハンニバルの少年風ではあるが、かなり文明化した少年が描かれていることは大いに理解できることである。少々変容しているもののトウェインの故郷への思いを描いたこの作品の中で、その中心的キャラクターであるトムが、必ずそのコミュニティに帰ってくるということは、作者自身の故郷への想い、そしてそこへ再び属したいという彼自身の希望を象徴していると言えるのではあるまいか。

『ハックルベリー・フィンの冒険』の世界において、どのキャラクターをストレンジャーと見なすのかについては、実はかなり難しい問題である。これまで、辞書の定義を含めて、ストレンジャーの役割を、固定した場所との関連で考えてきた。『ハック』において、固定した場所としてのコミュニティについては、セント・ピーターズバーグの村が挙げられる。『トム・ソーヤー』とは異なって、ハックはここで今や一応ダグラス未亡人とMiss Watsonのもとに引き取られ、きちんとした生活を送るようにしつけられている。彼は次第にそこでの生活が窮屈でたまらなくなり、そこへ行方知らずだった飲んだくれの父親が現れ、ハックが偶然手に入れた大金をせしめようと、彼を連れ出すのである。最初は“it warn't long after that till I was used to being where I was, and liked it, all but the cowhide part” (24). と父親との生活を楽しんでいたハックも、次第に父親の暴力が我慢できなくなり、そこを逃げ出して、ジャクソン島へと逃亡するのである。ハックがミシシッピ河を下るようになる最初のいきさつはこのようなものである。セント・ピーターズバーグは作品世界のコミュニティの中心というわけではなく、ここへのストレンジャーの侵入が問題となる物語ではないのである。それでは、『ハック』において、よそ者が侵

入する場となるコミュニティは存在するのであろうか。

コミュニティの役割を果たす重要な場は、二つ存在すると考えられる。一つは、ジャクソン島へ逃亡したハックがそこで逃亡奴隷のジムと出会い、筏で下ることになるミシシッピ河、もう一つは自由州に逃げる目的を持ったジムがCairoへの上陸に失敗したのち、とにかく河を下って行くしかない二人のホームともいうべき筏の存在である。

この作品におけるミシシッピ河の役割については、これまで多くの批評家が論じてきたところである。Lionel Trillingは、“Huck himself is the servant of the river-god, and he comes very close to being aware of the divine nature of the being he serves” (320).と述べて、河を神と見なし、一方Leo Marxは”it is the means by which Huck and Jim move away from a menacing civilization” (342).と述べて、河を手段と見なす。河が神であるか否かは確かに重要な観点ではあろうが、ここでは河をハックにとってのコミュニティと見なすことができるのかという点から考察する。ハックとジムは河岸での事件に巻き込まれたのち、河に戻り再び筏で下ることを始めるが、そのときのハックの河への想いは以下のような描写の中に現れている。

Two or three days and nights went by; I reckon I might say they swam by, they slid along so quiet and smooth and lovely. Here is the way we put in the time. It was a monstrous big river down there—sometimes a mile and a half wide; (96)

たとえば河岸の村でのGrangerford家の宿根事件といったような残虐な殺し合いを目の当たりにしたハックは、河へと戻って穏やかで静かな流れに心を癒されているようである。河はハックとジムにとって、安心して身を委ねることのできる一種のコミュニティとしての役割を果たしている。

また河を下る直接的な手段である筏も彼らにとっては、コミュニティ、運命共同体である。筏は最初二人にとって単なる道具に過ぎなかった。それが、いくつかの困難を乗り越えて筏に戻ったとき、二人は次のような感想を持つ。

We said there warn't no home like a raft, after all. Other places do seem so cramped up and smothery, but a raft don't. You feel mighty free and easy and comfortable on a raft. (96)

ホーム（家）を持たない二人にとって、今や筏はホームとなり、ここに帰って二人は安堵感を得ることができるのである。この作品においては、筏は大河を漂って行く二人にとっての不安定な共同体であり、何度も破壊されたりしながらもそのたびに再生する力を持っている。外面のもろさとは裏腹に、内面の強さを持った共同体なのである。この共同体が暗示するものは何なのであろうか。筏の上でハックとジムは、最小単位のコミュニティを構成する。当時の実際のアメリカ南部が奴隷制度を所有していたこととは対照的に、白人ハックの優位性はあるものの、かなりの平等さを持ったコミュニティなのである。しかも二人の間により深い人間的な愛情が芽生えていくに従って、この筏共同体は物理的な弱さがあっても、決して破壊されない結びつきの強さを持つものへと進化していく。

河と筏共同体を一種のコミュニティと見れば、コミュニティへの侵入者としてのストレンジャーは、王様と公爵と名乗る二人のベテン師であると言えよう。彼らは河岸でいかさ

ま芝居をして人々から金を巻き上げようとして追いかけては、筏の上のハックとジムの平和なコミュニティを破壊し、拳銃の果てには金に目がくらんで、ジムを河下へとわずか40ドルで売り払うのである。公爵と王様の役割は、まさしくコミュニティの破壊者であり、それは第2章で述べたストレンジャーの役割と一致する。ただし、この二人には救済者の役割は与えられておらず、『ハック』におけるストレンジャーは一面的な役割を負っており、それは作者自身の内面の揺れが、80年代以降の作品群の場合ほど大きくないことを示しているのではなからうか。

さらに見方を変えてみると、ハックとジムが河岸のコミュニティに出かけていくとき、実は彼ら自身がコミュニティにとってのストレンジャーとなっていることに注目したい。たとえば逃亡奴隷のジムのことがどの程度知られているかを、ジャクソン島の対岸の町に探りに行くハックは、女の子に化けていてその状況は、町にとってはストレンジャーそのものである。そしてストレンジャーであったハックが再びストレンジャーとしての仮面を脱ぎ捨てられるのは、ミシシッピ河と筏なのである。最終的には彼らの旅はジムが公爵と王様によって売り払われたことを契機として、河下の町のPhelps 農場へと移る。ここではトムが突然登場し、またジムが自由になっていたこともわかり、最終的にはハックは Aunt Sallyに引き取られそうになることを恐れて、Territoryへと逃げ出すことを願うのである。この結末の意味については、いろいろと議論の分かれるところであるが、コミュニティとストレンジャーとの関わりを考えてきたこの小論の結論としては、インディアンテリトリーへと向かう結末こそが正しい結末であると主張する。ミシシッピ河から離れたハックにとって、今やコミュニティは消失してしまったのである。ハックがよそ者でない場所は、ミシシッピ河である。それは東部出身のオリビアと結婚し、ハンニバルから遠く離れてしまったトウェインが最も拠り所としていた場所でもあった。今やハックにとって所属する場所がないとすれば、彼は新たなコミュニティを求めて出かけていくしかなく、それはミシシッピ河へと別れを告げざるを得ないトウェイン自身の声でもある。ミシシッピ河へ決別を告げた以後の彼の物語世界、80年代以後の作品は変容し、ハンニバルを想起させはするものの、ミシシッピ河そのものが舞台となる物語を捨てて、別の舞台へと世界を変えてしまう。しかもそこにはコミュニティにとって破壊者とも救済者ともなり得るストレンジャーが登場し、コミュニティの姿そのものを変えてしまう力をも持つのである。

コミュニティとストレンジャーの関わりから、トウェインの作品世界を分析し、そこから『ハック』においての終章のミシシッピ河への決別が、トウェイン自身の作品の舞台と世界を変容させ、その後の作品群において破壊者と救済者の役割を持つストレンジャーが頻繁に登場するようになることを分析してきた。このような変化は、トウェイン自身の内面が年を経るにしたがってより複雑になり、オプティミスト的側面とペシミスト的側面が複雑に共存していることを暗示するものである。ミシシッピ河への決別が、彼の経済状態の悪化と家族の死などの時期にあてはまることを見ると、過去への想いを捨てて、むしろしっかりと現実と目を向けていこうとするトウェイン自身の静かな決意といったものも窺えるのではあるまいか。

参考引用文献

Clemens, Samuel Langhorne. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court: An Authoritative Text; Backgrounds and Sources; Composition and Publication;*

- Criticism*. Ed. Allison R. Ensor. New York: W.W.Norton & Company, 1982.
- *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. Sculley Bradley et al., 2nd ed. New York: W.W.Norton & Company, 1977.
- Gibson, William M. *The Mysterious Stranger Manuscripts*. Berkeley: U of California P, 1969, 221-405.
- Giddings, Robert. "Introduction." Mark Twain: *A Sumptuous Variety*. Ed. Robert Giddings. Totowa: Barnes & Noble, London: Vision, 1985.
- Gove, Philip Babcock, et al. *Webster's Third New International Dictionary*. Springfield: Merriam-Webster, 1986.
- Marx, Leo. "Mr. Eliot, Mr. Trilling, and Huckleberry Finn." *Adventures of Huckleberry Finn*. 336-349.
- Rule, Henry B. "The Role of Satan in 'The Man That Corrupted Hadleyburg'." *Critical Approaches to Mark Twain's Short Stories*. Ed. Elizabeth Macmahon. Port Washington: Keenikat, 1981. 76-85.
- Tririling, Lionel. "The Greatness of Huckleberry Finn." *Adventures of Huckleberry Finn*. 318-28.
- Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Malcolm Bradbury. Harmondsworth: Penguin Books, 1969.
- *The Adventures of Tom Sawyer*. 1922-25. Tokyo: Honn-no-Tomosha, 1988. 37vols. Vol. 8 of *The Writings of Mark Twain*.
- *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. London: Chatto & Windus, 1980.
- *The Man That Corrupted Hadleyburg and Other Essays and Stories*. Vol.23 of *The Writings of Mark Twain*. 1-69.